

修士論文要旨

障がい者に対する真宗伝道のあり方

内 藤 良 誠

目 次

- 第1章 障がい者とは
 - 第1節 障がい者の定義
 - 第2節 聴覚障がいとは
 - 第1項 聞こえの仕組みと行政上の分類
 - 第2項 聴覚障がい者という言葉の問題
- 第2章 手話とは
 - 第1節 手話という言葉とその分類
 - 第2節 日本手話の言語的性質
- 第3章 実習から窺う実状と課題
 - 第1節 仏教手話研究サークル れんげ
 - 第1項 活動内容
 - 第2項 「仏教手話研究サークル れんげ」の活動を中心にみる宗門のこれまでの取り組み
 - 第3項 「れんげ」における実習から窺う現状と課題
 - 第2節 手話通訳士への聞き取り
 - 第3節 「浄土真宗の救いのよろこび」の手話表現化
 - 第1項 「浄土真宗の救いのよろこび」について
 - 第2項 具体的手話表現化
- 第4章 課題とその克服への試案
 - 第1節 手話以外の伝達手段
 - 第2節 法話の通訳の問題
 - 第3節 聞こえないということへの理解
- 結 論

序 論

浄土真宗において伝道を考えたとき、本願寺及び各寺院にて最も積極的な活動は、法座における口述の法話であろう。その法話の場では、阿弥陀如来よりたまわるお念仏によって、生きとし生けるもの全てが間違いなく救われることが説かれる。しかしながら、現状において実際

にその話を聞くことが出来るのは、寺院へ足を運ぶことが出来て、さらに耳で「聞く」ことが出来るものだけであり、寺院に足を運ぶことが出来ないもの、耳で「聞く」ことが出来ないものは初めからその対象とされておらず、仏法に出遇う機会が極めて少ない。

本論では聴聞を大切にしながらも、これまでほとんど仏縁のなかった障がい者、その中でも特に、口述の法話を聴聞することが困難な聴覚障がい者に対し、どのような方法をもって仏法を伝えていくことが適しているのかを論じ、また特に、彼らが日常で使う「手話」での法話、あるいはその通訳の現状というものに焦点を当て、口述においてさえ容易ではない仏教・真宗の教えをどのように表し伝えていくことで、共に仏法に出遇い浄土真宗のみ教えをよろこぶことが出来るのかを、実習での学びをもとに論じていくものである。

本 論

第1章及び第2章で、聴覚障がい者という定義やその言葉のもつ問題、聴覚障がい者のコミュニケーション手段を概観し、続いて日本語と同様、独自の言語体系を持つ手話について論じる。手話には、日本語と同様に言語としての性質・体系をもつ日本手話や、日本語を基本とし、それを手指で表すシムコム等の分類がある。それらは失聴年齢や聞こえの程度によって使う人々が変わり、また必ずしも手話だけを使ってコミュニケーションをとるわけではない。それらのことを踏まえて、第3章、第4章では実習での学びを論じていく。

実習としては、手話での仏教用語の表現方法の検討や、ろう者との交流、また筆者自身の手話の獲得のための「仏教手話研究サークル れんげ」への参加、及び浄土真宗本願寺派僧侶であり、手話通訳士である中川醇誓氏への聞き取り調査が挙げられる。「れんげ」は本願寺派としては仏教用語の検討を続ける唯一のサークルであり、毎年秋の法要等で、全国のろう者に本願寺を案内している。ろう者の講師の指導のもと、基本的な手話の獲得や、仏教の用語の手話表現の検討がなされている。本年は親鸞聖人750回大遠忌法要の年であったため、法要に関する言葉の検討が多くなされ、また法要へのろう者の案内もなされた。宗門内で唯一仏教用語の検討を進める「れんげ」も、会員や参加者の減少という問題をかかえている。しかしこのような聴覚障がい者に対する取り組みの少なさが、宗門全体でどれほど課題として認識されているかは疑問であり、そのことが会員のモチベーションの低下につながる一因であるとも考えられる。

日本手話を話すことが出来て、ろう者にとって一番理解しやすいのは日本手話であると理解する中川氏は、仏教聖典の手話翻訳を行い、『手話仏教聖典(DVD)』(仏教伝道協会)の発行に貢献した。手話の単語の発生について、ろう者間でその言葉の必要性が感じられれば自然発生的に作られ定着していくのが言葉であり、いくら聴者が考えても、それが定着しないのであれば、また検討しなおす必要があることを述べ、このたび本願寺より出された『手話で表す仏

教用語』も、全てが定着するわけではなく、何度も検討される必要性を述べている。

また、「浄土真宗の救いのよろこび」を筆者自身が実際に手話で表現している。まず筆者自身の「私案」を作成し、それが「れんげ」にて修正された「修正後」の2種を作成した。その表現方法や日本語との違いを検討し論じていく際、手話が視覚言語である以上、文字のみによって表現することに限界があるため、参考資料として動画と写真解説と付しているので参照されたい。

「浄土真宗の救いのよろこび」は浄土真宗のみ教えを現代のことばで、出来るだけわかりやすい形で拝読・拝聴することができるよう検討が重ねられ、またそこに教えの要が含まれていることはもちろん、リズム・語感も検討されて作成されている。それを異なる言語体系をもつ手話で表現した際、それらは必ずしも当てはまらない。そのままの語順では意味が通らないものや、比喩的な表現の部分を、そのまま手話の単語で表現したのでは、その比喩のままに意味が伝わってしまうため、意識をし、そちらで表現した方が良い部分もある。手話は1つの言語であるため、異なる言語である日本語の言葉を、そのまま手話で表現したとして全ては伝わらない。手話を母語とする人が、手話で浄土真宗のみ教えを味わい、それをまた手話で伝えていくことが必要である。

聴覚障がい者であれば全てのものが手話を使えるわけではなく、逆に日常のコミュニケーションとして手話を使うものの方が少数である。それぞれの状況にあった情報伝達手段の体制を整えていくことが必要である。

しかし法話の通訳という場を考えた場合、話し言葉で話されるものは、やはりろう者にとっての話し言葉で伝えられる方が伝わるものが多く、また感情表現が大切な法話は、やはり感情の込めやすい手話で行われるほうが、仏法を味わい喜ぶという意味では適しているであろう。その手話でも、やはりしっかりとした言語形態をもつ日本手話が望ましいであろう。その場合、視覚言語であることを考慮し、照明等にはしっかり気をつけなければならない。

結 論

ろう者は聴者とは違う生活・文化をもっているため、聴者においては失礼と思われる行為もろう者間では常識である場合や、またその逆の場合も多い。伝道ということを考える大前提として、ろうの文化という聴者とは違った文化があり、そこに生きる人たちがいることを理解し、その文化を理解することが大切なのはいうまでもない。

これまで宗門においては聴覚障がい者に対して積極的な活動をしてこなかったが、『手話で表す仏教用語』が出版され、1つの形として動き出した今、それを突破口に継続的な活動が必要である。聴覚障がい者において、手話を母語としてもつろう者であれば、手話によって浄土

真宗のみ教えを領解し、そのみ教えをまた手話で伝道していき、日本語を母語としてもつものは、それぞれに適した日本語の表現方法で浄土真宗のみ教えを領解し、そのみ教えをまた各々の方法で伝道していく環境が作り上げられることが必要である。

参考文献

- 岡典栄・赤堀仁美『文法の基礎からわかる 日本手話のしくみ』大修館書店 2011
- 岡亮二『教行信証口述50講：親鸞のこころをたずねて』教育新潮社
- 花香信宏「『恩徳讃』の手話化にかかわって—そして今後の取り組みについて」『宗報』10月号 2007 本願寺出版社
- 神田和幸『基礎から学ぶ手話学』福村出版 2009
- 木村晴美『日本手話とろう文化 ろう者はストレンジャー』生活書院 2007
- 木村晴美『ろう者の世界 続・日本手話とろう文化』生活書院 2009
- 桐溪順忍『教行信証に聞く』教育新潮社 1966
- 鈴木康之『手話のための言語学の常識』全日本ろうあ連盟 2001
- 村上速水『親鸞教義とその背景』永田文昌堂 1987
- 矢田了章『『教行信証』入門』大法輪閣 2008
- 教学伝道研究センター「『拝読浄土真宗のみ教え』の刊行にあたって」『宗報』6月号 2009
- 教学伝道研究センター「『念仏者の生活実践の展開』について」『宗報』3月号 2010
- 教学伝道研究センター「『拝読浄土真宗のみ教え』の活用」『宗報』6月号 2011
- 現代思想編集部編『ろう文化』青土社 2000
- 手話表現検討委員会『手話で表す仏教用語』浄土真宗本願寺派社会部 2011
- 全国手話研修センター『新・手話教室 入門』全日本ろうあ連盟 2009
- 拝読浄土真宗のみ教え編集委員会編『拝読浄土真宗のみ教え』本願寺出版 2009
- 仏教伝道協会『手話仏教聖典』仏教伝道協会 2007
- 『広辞苑 第5版』岩波書店刊 1998
- 『広辞苑 第6版』岩波書店 2008
- 『大辞林 第1版』三省堂 1988
- 『大辞林 第3版』三省堂 2006
- 『浄土真宗聖典（註釈版）』浄土真宗聖典編纂委員会 1988 本願寺出版
- 『浄土真宗聖典七祖篇（註釈版）』浄土真宗聖典編纂委員会 1996 本願寺出版

論文

- 長南浩人「聴覚障害者の物語の読解に対する手話表現付加の効果」『特殊教育学研究』37 神奈川県立平塚ろう学校 2000
- 長南浩人「日本手話、中間型手話、日本語対应手話の構造の違いが聴覚障害者の手話の理解に与える影響」『教育心理学研究』49 日本教育心理学会 2001
- 中村英龍「還相摂化の成立構造について」『真宗研究會紀要』29 龍谷大学 1997
- 平芳則、青木さつき、入山満恵子、栗崎由貴子「手話とはどのような言語か」『明倫歯科保健技工学雑誌』明倫短期大学 2008
- 冷水来生「聴覚障害児の文理解の発達と手指的表現能力の関係について」『特殊教育学研究』26 京都教育大学 1988